

西アフリカ、ブルキナファソに おける恋愛と結婚

現代の日本の結婚といえば、自ら選んだ好きな相手と、教会でウェディングドレスとタキシードを身にまとい、神父の前で永遠の愛を誓う、といったことをイメージするだろう。一方、アフリカの恋愛、結婚はどうだろうか。最近ではアフリカが紹介されるテレビ番組が多くなっていくが、アフリカの恋愛や結婚を紹介する番組は少ないだろう。私は西アフリカのブルキナファソに5年間以上暮らし、現地の女性と知り合い、現地で恋をして、結婚式を挙げた。この体験をもとに、ブルキナファソの恋愛から結婚までを紹介したい。

ブルキナファソではかつて、結婚は家と家の結びつきであり、結婚相手は親族が決めることが多く、自由な恋愛に対して束縛されることが多かった。しかし、時代の流れとともに、恋愛に対する考え方は変わり、近年の都市部においては、日本と同じ様に皆が自由に恋をして、好きな人と結婚する事が多い。15～16歳を過ぎれば、多くの人が異性との付き合いを始める。日本では草食系男子という言葉があるように、恋愛に消極的な若者の男性が増えている。それに対し、ブルキナファソでは男性から女性に交際

を求めるのが当たり前であり、気になる女性がいたら、とにかく強気に声をかける。面識のほとんどない女性にも声をかけることがあり、日本でいうナンパであるが、ここではそれが日常茶飯事である。女性も声をかけられることを迷惑とは思わず、むしろ声をかけられることによって、自分が魅力ある女性として自信が持てるそう。男性が女性から好かれるには、ルックスの良さ、お金持ち等、さまざまな要素があるが、一番は「優しさ」であり、好きな女性に対してとにかく紳士的に接する。一方、女性は自分から男性に声をかけることはほとんどないため、いかに見目で男性を惹きつけようとするのがポイントになる。特に男性はふくよかな体型を好む人が多く、女性はご飯をたくさん食べるだけではなく、伝統薬を飲んで太ろうとする人がいるくらいだ。

ブルキナファソの都市部では多くの人が恋愛に対して積極的で、楽しんでおり、恋がしやすい雰囲気がある。私自身は、妻と知り合ったきっかけは、偶然、市場で出会い、些細な会話をしただけだった。しかし、この日本を代表する草食系の私でも、ブルキナファソでは、積極的に彼女に声をかけて、付き合おうと思う気になった。これが、日本だったら「声をかけて気持ち悪いと思われたらどうしよう…」と、マイナスなことばかりを考え、何もせず時間が過ぎただけだった

かもしれない。

付き合うようになってから、何度かデートをしたが、ブルキナファソでは食事、ダンス、映画程度しか娯楽はない。日本に比べて選択肢が少ないうえに、それほど楽しめるものではない。一方、家族や友人を訪問して、いろんな人とおしゃべりする事もよくしたが、それは楽しかった。話した内容はどれも他愛もないことであったが、妻とともに多くの人とさまざまなことを話すことで、互いを良く知る良い機会だったと思う。

伝統的な婚約式

付き合い始めてから3年が経った頃に結婚を決意したのだが、ブルキナファソでは結婚をする前に、伝統的な婚約式をしなければならない。この婚約式とは、新郎の家族代表が新婦の本家に出向き、結婚の承諾を得るために、家族間で行う儀式である。私は妻の両親の家には何度も行っていたことがあったが、本家の人に会う機会は少なかった。そのため、本家のことをほとんど知らなかったのだが、一つ心配になっていたことがあった。それは、婚約の際にイスラーム教徒へ改宗しなくてはいけないことである。改宗とは信仰する宗教を変えることだが、イスラーム教徒の女性と結婚する場合、たとえ私が仏教徒であ

ろうとも、イスラーム教徒に改宗しなければならない。イスラーム教徒になると酒や豚を食べることが禁止されている。私自身、お酒はそれほど飲めないが、豚料理が好きであるため、食べられなくなるのは辛い。妻の実家はイスラームを信仰していたが、義父がそれほど熱心ではなかったため、それまでに強要されるようなことはなかった。一般的にもブルキナファソでは宗教に対して大らかであり、他人に強いることは少ない。しかし、家族によって宗教に対する熱心さには違いがある。妻の本家は宗教に対して厳しく、改宗後に規律を守るように私に対して口うるさく言ってこないだろうか、不安があった。

婚約式の当日、私は現地に来られなかった日本の身内の代わりに、ブルキナファソに滞在していた日本人の上司や友人等6人を、新郎側の代表として引き連れて本家に向かった。新婦の本家からは5～6人の親族代表が待ち受けていた。この際、新婦はこの場には立ち会わず、家で控えていた。婚約式の進行は仲人が行うことになっている。私たちは妻の義理の兄に仲人をお願いしたが、一般的には新郎新婦の共通の知人で社会的に地位が高い人が務める事が多い。新婦側と新郎側の親族が向かい合って座り、お互いが直接話し合うのではなく、両者の間を仲人が往復して、話を取り次ぐような形で行った(写真①)。この婚約式でメインとなることは、

新郎側が新婦側の本家に結納を収めることである。本家が結納を受け取れば結婚が受け入れられることになる。結納の品は婚約式を行う前から、仲人と本家側が話し合っていて決めていた。こういった品に決めるのかは、家によってさまざまだが、新郎新婦の家柄や職業等を考慮して決めている。私の知人は、新婦が高貴なイスラームの家柄だったことから、牛10頭（40～50万円相当）と高い品を納めなくてはならず、本人は

お金を貯めるのに苦勞をしたそうだった。また、外国人はお金持ちと見なされることが多く、多額の結納を求められることもある。しかし、私の場合は、本家が私を外国人としてではなく、現地人と対等にみてくれ、羊1匹、鶏1羽、塩50kg、米50kg、嗜好品のコーラの実、さらに400円程度の現金、全部で3万円相当の品を収めるのに留まった。このように本家が私を現地人と対等に配慮してくれたことは、とても嬉しいことだった。



写真①伝統的婚約式

た。こうして本家が結納を受けとった後、新郎側と新婦側の代表が一人ずつ握手をして、そして、料理が振る舞われた。

ところで、私が心配をしていた、イスラーム教への改宗についてだが、本家の家の壁をよく見ると聖母マリアの絵が描かれているではないか。また、料理が振る舞われる最初に、ゾムコムと呼ばれるトウジンビエのジュースが、ヒョウタンの器に注がれてでてくるのだが、そのヒョ

ウタンの器の側面にも、聖母マリアの絵が刻まれていた。つまり、本家自体がキリスト教に改宗していたことが、その時はじめて分かり、私は拍子抜けをした。ブルキナファソでは改宗をすることはまれにあることだが、まさか妻の本家が改宗していたのには、大変驚いた。結局、私はイスラーム教やキリスト教に改宗を求められることはなかった。



写真②市役所での結婚式